様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６９６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０８７５

研究課題名（和文）変形性股関節症患者におけるQOL維持・改善に向けた縦断的研究

研究課題名（英文）A longitudinal study of quality of life among people with hip osteoarthritis.

研究代表者
藤城　有美子（Fujishiro, Yumiko）

駒沢女子大学・人文学部・教授

研究者番号：４０３１８２８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では1年間の追跡調査を行い、変形性股関節症患者の主観的QOLに関連する変数を検討した。患者241人に協力を依頼、236人から同意を得て、220人から調査票を回収した。1年後の調査には、2017年3月末時点で115人が参加している。ベースライン時の疾病理解、重症度、自己効力感は1年後のQOL全般と関連していたが、疼痛が関連していたのはQOLの身体的側面のみであった。ベースライン時の疼痛と陽性感情の関連は、1年後には見られなくなった。1年後の治療への主体的取り組みは、同時期の陽性・陰性感情と関連していた。変形性股関節症患者の治療において、疾病の理解と主体的取り組みが重要であることが示された。

研究成果の概要（英文）：We performed a one-year follow-up survey in this study and examined a variable in conjunction with the subjective QOL among people with hip osteoarthritis. I asked 241 patients for cooperation, and obtained its consent from 236 patients, and collected a questionnaire from 220 patients, and 115 patients participated in the second investigation at the end of March, 2017. The understandings of own disease, severity, self-efficacy on the baseline were related with the QOL one year later, but the pain was related only with the physical side of the QOL. On the baseline, correlations between pain and positive feelings were shown, but there was not correlation one year later. The independent-minded stance on treatment one year later was related with both positive and negative feelings of the same time. In the treatment of people with hip osteoarthritis, it was shown that understandings of own disease, and independent-minded stance on treatment were important.

研究分野：メンタルヘルス

キーワード：変形性股関節症　患者教育　セルフ・マネジメント　生活習慣　自己効力感　VAST　QOL

１．研究開始当初の背景

変形性股関節症は、非炎症性、慢性・進行性で、股関節部の痛みと動作制限を主症状とする疾患であり、日常生活に制限を生じやすい。また、慢性・進行性の疾患であることにより、身体・心理・社会的に負荷が高い疾患でもある。これら諸要因が連鎖し合い、患者の生活の質（Quality of Life: QOL）が次第に低下していく例も多い。

根治の難しい慢性疾患については、QOL を維持向上が重要な課題となる。そのためには、適切な患者教育とセルフ・マネジメントが必要であると考えられる。しかし、変形性股関節症の病態は加齢とともに徐々に進行し、活動の制限もそれに伴って少しずつ増悪するために、初期の患者は、「病者である」「障害を伴っている」という意識が希薄である。さらに、患者の訴えが痛みや疲れなど日常的な愁訴であるために、周囲においても疾患や障害の意識が薄くなりがちである。このことは、日常生活における患者のセルフ・コントロールを難しくする要因ともなっている。

変形性股関節症患者の身体的・心理的・社会的側面の関連については、城川ら [1-3] の一連の研究がある。生活満足度の変化には、若年時では症状の影響が大きいものの、中年以降では活動状況や社会参加の変化の影響をより大きく受けていた [1]。この結果は、回顧的に得られたものであるため、長期の追跡調査により患者の QOL に寄与する変数を検討する必要がある。

また、変形性股関節症の治療法には、大きく分けて保存的治療と手術的治療があるが、特に前者についての研究はまだ少数である。

２．研究の目的

本研究では、変形性股関節症患者を対象とした 1 年間の追跡調査を行い、その主観的 QOL の維持・向上に関わる身体・心理・社会的変数を探索的に検討する。

なお、この研究は、その後に続くより長期の追跡調査のプレ・スタディである。

３．研究の方法

(1) 対象

2014 年 9 月から 2016 年 8 月の 2 年間に、X 病院を新規に受診した患者で、変形性股関節症と診断され、かつ、保存療法に導入された 241 人に対して、調査協力を依頼した。治療に導入された際に、全員に主治医により患者教育が行われた。

(2) 方法

調査項目は、性別、年齢、重症度、疼痛、患者教育・疾病理解、治療方針への主体的関与、生活のセルフ・コントロール、運動習慣、自己効力感、QOL とした。

初診時（第 1 回調査）と 1 年後（第 2 回調査）に、本人に対し、生活記録票の提出を求めるとともに、自記式質問紙調査票の配付・回収を行った。得られたデータは、主治医および理学療法士が採取した医療データとリンクした。なお、使用した項目のうち、既成の尺度は以下の通りである。

自己効力感：「特性的自己効力感尺度」（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田，1995）を使用した。個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の自己認知を測定するものである。1 因子構造で 5 件法、全 23 項目からなる。

主観的 QOL：「WHO SUBI」（The Subjective Well-Being Inventory：以下 SUBI）、および、「SF-36」（MOS 36-Item Short-Form Health Survey）Ver.2 スタンダード版を使用した。SUBI は、主観的幸福感を構成する陽性感情と陰性感情の尺度から構成されている。陽性感情と陰性感情は必ずしも相関せず、それぞれの感情が独立して働くと考えられている（例：陰性感情が若干強く感じられるようなストレス状況でも、陽性感情を感じることができれば充実した日常生活を送れる可能性が出てくる等）。そのため、がんや慢性疾患、障害者などの心の健康の把握にも用いられている。質問項目は 3 段階評価の 40 項目から構成されており、11 の下位尺度に分けられている。SF-36 は、国際的に広く使用されている包括的な健康関連 QOL 尺度であり、身体機能、日常役割機能（身体）、体の痛み、全体的健康感、活力、社会生活機能、日常役割機能（精神）、心の健康の 8 つの健康概念から構成されている。国民標準値が公開されており、それを基準にして対象群の健康状態を検討することができる。

SF-36v2® Health Survey © 1992, 2000, 2003 Quality Metric Incorporated, Medical Outcomes Trust and Shunichi Fukuhara. All rights reserved.

(3) 倫理的配慮

実施医療機関から研究許可を得た上で、対象者に文書および口頭で説明を行い、参加同意を得た。1 年後の調査時にも、改めて説明を行い、同意を得た。データのリンクは当該医療機関内で行い、分析の際は ID 番号で管理し、匿名化した。なお、本研究は研究代表者の所属機関で倫理審査を受け、承認された。

４．研究成果

(1) 参加者

第 1 回調査では、236 人から参加同意が得られ、220 人から調査票が回収された。この 220 人に対して実施した 1 年後の第 2 回調査には、2017 年 3 月末時点で 115 人が同意、参加している。

(2) 1 年後に改善した変数

1 年後に改善が見られた変数は、治療への主体的取り組み、疼痛（Visual Analogue

Scale for Time Course: VAST)、重症度（JOA hip score：日常生活動作）、QOL（SF-36）であった。

(3) 1 年後の QOL と有意な相関を示したベースライン時の変数

ベースライン時の疾病理解、重症度、自己効力感は、1 年後の QOL と有意な相関を示したが、疼痛は有意な相関がなかった。また、ベースラインでは、疼痛が強いほど WHO SUBI の陽性感情が低かったが、1 年後には有意な相関を示さなくなった。

Tab. 1　ベースライン時の変数と 1 年後の QOL（WHO SUBI）の関連

		WHO SUBI	
		陽性感情	陰性感情
個人属性	年齢	-0.027	0.204
	不調自覚時年齢	-0.025	.297 *
疾病理解	仕組・状態	.306 **	0.005
	治療・予後	.221 *	0.020
	自己管理	.308 **	0.209
主体的取り組み		0.018	0.020
疼痛	平均値	0.016	-0.015
VAST	最小値	-0.051	0.087
	最大値	0.080	-0.026
	範囲	0.140	-0.116
重症度 1	疼痛：右	0.061	0.003
JOA hip score	疼痛：左	-0.166	-.250 *
	可動域：右	-0.084	-0.177
	可動域：左	-0.110	-.254 *
	歩行能力	0.032	-0.111
	日常生活動作	0.105	-0.043
	合計：右	0.078	-0.062
	合計：左	-0.099	-.261 *
重症度 2	屈曲：右	-0.140	-0.194
関節可動域	屈曲：左	-0.194	-0.218
	外転：右	-0.111	-0.118
	外転：左	-0.086	-0.208
自己効力感		.327 **	.336 **

注 1）Pearson の相関　*: p<.05, **: p<.01
注 2）VAST: Visual Analogue Scale for Time Course

Tab. 2　ベースライン時の変数と 1 年後の QOL（SF-36: NBS）の関連

		SF-36		
		身体的 QOL	精神的 QOL	役割/社会的 QOL
個人属性	年齢	-.241 **	.242 *	-.199 *
	不調自覚時年齢	-.244 **	.196 *	-0.104
疾病理解	仕組・状態	-0.058	0.111	0.045
	治療・予後	-0.044	.216 *	0.062
	自己管理	0.029	0.149	0.020
主体的取り組み		-0.017	0.094	-0.035
疼痛	平均値	-.351 **	0.026	-0.106
VAST	最小値	-.233 *	0.021	-0.112
	最大値	-.335 **	0.065	-0.133
	範囲	-0.115	0.049	-0.026
重症度 1	疼痛：右	0.182	0.083	.221 *
JOA hip score	疼痛：左	0.182	-0.143	0.003
	可動域：右	.338 **	-0.034	0.166
	可動域：左	.243 **	-0.150	-0.056
	歩行能力	.411 **	0.003	0.130
	日常生活動作	.409 **	0.027	.195 *
	合計：右	.357 **	0.079	.244 **
	合計：左	.327 **	-0.097	0.050
重症度 2	屈曲：右	.359 **	-0.072	.239 *
関節可動域	屈曲：左	.278 **	-.196 *	0.049
	外転：右	.292 **	-0.065	.243 **
	外転：左	0.137	-0.091	0.046
自己効力感		0.043	.315 **	0.054

注）Pearson の相関　*: p<.05, **: p<.01
注 2）VAST: Visual Analogue Scale for Time Course

(4) その他

1 年後の疾病理解は、同時期の WHO SUBI の陽性感情のみと有意な相関を示したが、治療への主体的取り組みは陽性・陰性感情の両方と有意な相関を示した。さらに、疼痛は QOL の身体的側面とは有意な相関が見られたが、心理社会的側面とは有意な相関がなかった。

(5) 考察

変形性股関節症患者において、QOL の心理社会的側面を向上させ、かつ、陽性・陰性感情の両面を改善するには、疼痛を緩和するだけでなく、患者教育を通して自身が治療に主体的に関わっている感覚を育てる重要性

が示された。

引用文献

1) 城川美佳・熊倉伸宏・矢野英雄：変形性股関節症の経過と生活.Hip joint 29,92-97, 2003.
2) 城川美佳・井原一成・熊倉伸宏・矢野英雄：変形性股関節症の経過と生活―質的研究手法による検討. 民族衛生 70(1), 3-17, 2004.
3) 城川美佳・井原一成：変形性股関節症患者のライフステージ. Journal of Clinical Rehabilitation, 17(4), 337-343, 2008.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　２件）

① Fujishiro Y, Hirabe M: Relationship between self-management and quality of life among people with hip osteoarthritis. The 31st International Congress of Psychology. 25, July, 2016. PACIFICO Yokohama (Kanagawa, Yokohama).

② Hirabe M, Fujishiro Y: Relationship between pain and quality of life among people with hip osteoarthritis. The 31st International Congress of Psychology. 25, July, 2016. PACIFICO Yokohama (Kanagawa, Yokohama).

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　該当なし

６．研究組織

(1) 研究代表者
藤城　有美子（FUJISHIRO, Yumiko）
駒沢女子大学・人文学部・教授
研究者番号：40318283

(2) 研究分担者
平部　正樹（HIRABE Masaki）
東京未来大学・こども心理学部・講師
研究者番号：20366496

(3)連携研究者
城川　美佳（KIGAWA Mika）
富山大学・医学部・助教
研究者番号：10177785

(4)研究協力者
矢野　英雄（YANO Hideo）
富士温泉病院・整形外科・名誉院長